



特定非営利活動法人 高槻ライフケア協会

(大阪府高槻市)

地域住民の交流事業を地域のボランティアによる運営委員会で企画立案、運営し、地域における高齢者や障害者の拠点・居場所づくりを行っている。1998年の法人設立以来、地域住民のニーズに合わせてさまざまな交流活動を積み重ね、孤立や閉じこもり、筋力低下による外出困難、認知症の初期にあたる人たちなどを包含した見守りと社会参加への支援、交流を促進している。

助成テーマ

高齢者の居場所づくり・地域交流センターの運営と存続

[事業内容]

地域住民の交流活動を通じた居場所作りを、地域のボランティアによる運営委員会で企画立案、運営してきた。新型コロナウイルスの感染拡大予防のため、ほとんどの事業を縮小せざるを得なかったが、新たなプログラムの在り方や開催手法を再考して、活動を再開した。



[事業の実績]

- 参加者数：延べ464人
- 事業に関わったスタッフ・ボランティアの数：延べ170人
- プログラム実施回数：延べ80回
- 作成物：地域交流センターだより(150部)
- 表彰：ライオンズクラブ高槻基金(高齢化社会で認知症の初期の人たちの見守りと社会参加への支援交流促進する活動の功績)



[事業の成果]

何ができるのかの試行錯誤ではあるが、地元自治会の協力を得て集会所を借り受けての文化プログラム、隣接する公園の活用による屋外事業、参加対象地域を分けて人数を制限した開催手法、「おにぎりの会」に変更してのランチの会の開催など工夫を織り交ぜ、コロナ禍以前の規模には及ばないものの、これまで続けてきた人と人とのつながりを絶やさないようにすることに重点をおいた事業を実施できた。交流センターの事業が途絶えることなく存続できたことは、コロナ禍後に続く基盤となった。また、ボランティアの活動参加へのインセンティブを与えることにもつながった。

[今後の展望・課題]

残念ながら、感染拡大が比較的鎮静化した期間は短期間にとどまり、広く地域に呼びかけてのイベントの開催などは年度末時点で実現に至っておらず、小規模プログラムの積み重ねによる交流機会の確保を中心とせざるを得なかったが、あたりまえに続けてきた人と人とのつながり方や支えあい方のある以前の日常に戻るための条件の確保、アフターコロナに向けた地域活動存続にはなくてはならない「つなぎ目」の期間になったものと考えている。少人数開催や実施プログラムの減少が続く現状では、費用に見合った収入の確保が難しく、寄付の呼びかけなどの収入確保、会計の明確化、役員による運営会議の常時開催、事業報告・PR手段の確立など、NPO法人としての組織運営の強化を図りながら、今後の活動につなげたい。